

開発主義の構造と心性 : 戦後日本がダムでみた夢と現実

著者	町村 敬志
学位授与年月日	2013-07-11
URL	http://doi.org/10.15083/00007214

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 町村敬志

本論文は、戦後復興の象徴とされ、高度経済成長への転換点とも位置づけられる「佐久間ダム」の建設という巨大プロジェクトを素材に、戦後日本社会における「開発主義」の形成とその構造的な特質を分析した成果である。その語の初発の用法においては、資源・エネルギー問題に狭く限定されていた「開発」が、なぜ国家による国土空間の再編とそれに適合的な社会の構築を広く含意し、また主体育成の啓蒙主義とも重なりあいつつ「豊かさ」を追求しようとする人びとのローカルな実践をも曖昧に包摂するようになったか。ある地域社会に開発レジームともいふべき構造が生まれ、開発主義の心性が形成され変容していく事例を通じて、詳細に分析している。

第1部の実態分析では、まず第1章で戦後復興期における開発ナショナリズムが、戦前の植民地支配やその喪失といかに接続し、またアメリカの TVA 政策の理念と呼応しつつ、産業開発・国土開発の主体を立ち上げていったかを、グローバルな視野で論ずる。第2章では県・地方レベルでの開発体制に焦点を移し、天竜川総合開発における電源としてのダム開発の比重増大、産業開発青年隊や農村建設青年隊といった青年の動員体制、さらにはユネスコ・プロジェクトとして始まった「近代技術の社会的影響」調査などの重なり合いを描き出し、開発政策が産業政策としてだけでなく福祉政策としての特質をもやがて有していくことを明らかにした。第3章ではローカルな受け入れ基盤としての地域社会に焦点をしばり、村における「開発の時間／開発の空間」の厚みをもった成立のプロセスを浮かびあがらせる。明治以来の鉱山開発や山林事業や製紙工場受け入れの歴史を踏まえつつ、強い反対運動が起きなかったこの事例のキーパーソンとしての村長の地域社会での活動や、村人たちのリアリティを詳細に分析する。佐久間ダムの「開発」の記憶や忘却のありようを探った第4章の村人への意識調査の分析と併せて、そこに潜む多義的で淡い「イデオロギー」が論じられていく。

第2部の表象分析では、岩波映画製作所が作成した PR 記録映画『佐久間ダム』の制作、シーン構成、上映・鑑賞の実態や、演出家が保存していた製作ノートが発掘や検討などを通じて、地域社会学において手薄であったメディア表象分析の領域を切り開いた。とりわけ、この映画が電力開発の効用を強く描かず、建設者の労苦や犠牲者の実態、恩人ともいふべき功績者を映さなかったことの意味の探究は、第1部の現実分析があればこそ説得力・遡及力をもつ発見である。アメリカ製の巨大建設機械の映像が生み出す開発のイメージや、東南アジア映画祭への出品と受賞の政治性、映画人たちの動員と抵抗の過程の分析は、著者のいう「可視化と不可視化のポリティクス」を鮮やかに描き出し、開発主義の構造と心性とに鋭く迫る手法となりえている。

本論文は、地域社会学の研究蓄積と、メディア文化研究の手法を統合することで初めて達成できた、開発主義批判の社会学の意欲的な研究である。本審査委員会は、博士(社会学)の学位を授与するにふさわしいものと判断した。